

神は奴隷状態の民をエジプトから脱出させようとモーセを遣わした(出エジプト 3:10)。モーセは、遣わした神の名を民が問うであろうから、どう答えればいいのか(3:13)と尋ねる。すると神は「わたしはある。わたしはあるという者だ(3:14)」と自身の名を明かした。

名には某かの意味が込められている。現代に特有のキラキラネームも、漢字なので意味は分かるが、読みはひねりが利いていて曲芸的。

かつての米国先住民は、子供がある程度成長するまで名を付けず、その子の性質が現われてから「右手に斧を持つ者」とか「狼と眠る者」とか、名は体を表わすごとくに名付けていたそうだ。

「わたしはある」という風変わりな神の名も、生きて働かれる神の、その実態を言い表しているのだろう。

ペトロはローマの百人隊長コルネリウスの家で、彼に語った。「預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししている(使徒 10:43)」。

イエスという「その名」を信じる、そのことで罪が赦される。その名に、赦しの効能めいた力があるのだろうか。

「イエス=ヨシュア」の謂は「ヤーヴェ(神名)の救い」だが、これはヘブライ男子のごく一般的な名に過ぎない。だから名それ自体の意味ではなく、神がモーセに「わたしはあるという者だ」と答えたように、イエスの実態、イエスに起ったことを「名」と言い換えているのだろう。

それでは実態としての名とは何か。神の御子が地上に生まれたクリスマスなら「見よ、おとめが身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる(マタイ 1:23)」。その名、つまり実態は「神は我々と共におられる(1:23)」こと。

神がどのようにおられるかは、イエスの公生涯の、言葉やふるまいや奇跡として具体的に記されている。そしてそのどこにも、無条件の恵みと罪の赦しが現れている。

いやそれ以上に、「神は我々と共におられる」最終的な十字架に注目したい。侮辱され、血を流し、苦しみ、叫びながら死んでいった十字架(ルカ 23:46)こそが、イエスの名、実態である名のだ真ん中ではないのか。私たちはこの凄まじい名を「然り」とし、罪の赦し(使徒 10:43)、真の自由が与えられる。

罪とは何か。私たちは、これまで自らを省み、悔い改め、涙を流し、自分の罪と向かい合ってきた。私たちの罪とは、はたして認識できる程度の、受け止められる程度の、自覚して悔い改められる程度の「小罪」なのだろうか。

十字架上でイエスは祈った。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです(ルカ 23:34)」。彼らとは誰か。権力者も、群衆も、そして私たちもそれに数えられている。

幾度となく悔い改めて来たが、実態は「自分が何をしているのか知らない」ほどに、罪深い。己自身には捉えがたい深い罪ゆえに、イエスは「私」のために執り成して下さる(23:34)。

私の自覚や理解を超える底知れぬ罪を、どうやって悔い改めればいいのか。それほど罪は、何によって赦されうるのか。もう十字架によるより他ない。

「イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる(使徒 10:43)」。イエスの名とは、この十字架の「名」なのだ。

私たちの底知れぬ罪、と随分脅してしまっただが罪はど真ん中ではない。ど真ん中は、それほど罪が、十字架で赦され、贖われ、死をも超え、自由へと解放される恵み。それがイエスという「名」。



#### 《おまけのひとこと》

うっかり気づかないでいる程度の罪ではない あるいは原罪にしてしまうと 人類共通の根源的な罪として軽くなってしまう 底知れぬ罪は 一人ひとり個別にあり 十字架で個別に赦されている